

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

B. 円滑な学位授与の促進

②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化

取組を進めるに当たり困難であった事例について

B. 円滑な学位授与の促進

②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化

《人社系》

●京都大学教育学研究科臨床教育学専攻

「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムにおいては、(臨床の知を創出する)質的に高度な人材を養成することを目的とし、その結果として学位を取得する学生の増加を目指した。具体的なプログラムとしては、外国語論文の執筆支援や国際学会への発表の補助などを実施した。しかし、こうした支援が成果として現れるのには時間を要し、明らかな数値の増加に結びつかなかった。

(苦労したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

本プログラムにおいては、単なる量的な変化ではなく質的な向上を目指した。そのため例えば、学位取得においても、従来本研究科においては、査読付き論文2本以上の業績としていたところを、臨床心理学領域においては、査読付論文3本以上の業績を、学位執筆資格とするなど、学位取得のハードルを高く設定した。そのために、短期間での学位取得数の量的増加は難しかったと考えられる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

質的な程度は下げずに学位取得を促すために、以下の2点の対応を行った。

- (1) 学位取得に至る指導を強化するべく、教務委員会、研究科教授会での検討を提案した。(プログラム終了後、実施に至った。)
- (2) 現行の博士学位論文作成要領は問題点が多く、その内容も周知・徹底されていなかった。従って、その全面改訂を行うことを提言した。(プログラム終了後、実施され、平成23年4月に新版が配られる。)本プログラム実施中には、学位取得率の量的増加が顕著に見られず、取り組み推進上困難さを覚えた。しかし、取り組み終了後になって、明らかな学位申請数の増加が見られ、このことから、プログラム実施による効果(特に質的变化)は、短期間での成果となって現れるわけではなく、相当数の年数を必要とすると思われた。

《理工農系》

●筑波大学システム情報工学研究科リスク工学専攻

「達成度評価システムによる大学院教育実質化」の事例

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

B. 円滑な学位授与の促進

②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

達成度評価システムの実施は、各学生の履修状況の進展の程度を的確に把握し、それに応じて的確な教育指導が可能な反面、教員側負担が大きい。大学院 GP 実施中は、達成度評価システムプロトタイプの開発を主眼として相当の人手を費やしてきたが、プログラム終了後の現在、継続的に実施して行くに当たって、達成度評価システムの効果維持と省力化のバランスをどのように保っていくかの試行錯誤が続いている。

(苦労したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

学生に対するきめ細やかな対応と評価を基本的な理念とする達成度評価の実施においては、様々な手続き、学生との対応、資料のチェックや集約整理等、多大な事務的業務が発生する。一部は高度情報化を進めて効率的な処理が可能にしているが、個別の教員と学生の協議・指導等、資料のチェック等、人手を費やすことが不可欠な状況がある。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

現在、高度情報化を薦めることによって、煩雑な事務手続き・チェックを効率的に進める方策について検討するとともに、達成度評価システムで実施する項目や手続きの見直しを継続的に行っている。

●京都大学工学研究科

「インテック・フュージョン型大学院工学教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本取組みにより、成績評価基準を記載したシラバスを工学研究科において開講される全科目について作成し、ホームページ上で公表した。

博士学位取得基準やロードマップ等を文章化して公表する取組みに着手した。工学研究科共通の博士後期課程学位取得基準を新たに文章化・公表することはできたが、共通のロードマップを作成することはできなかった。

(苦労したこと、困難であったこと具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

工学研究科の専攻分野は多岐に亘っており、専攻分野の特性に応じた伝統的な手順により博士学位審査が行われてきた。博士学位研究の中間評価を実施する専攻、審査付き論文の発表件数を学位審査請求の目安にする専攻等、専攻分野における手続きに変化が大きいことが、実質的に意味がある学位取得ロードマップを工学研究科として統一して定めることが困難であった原因である。

しかし、学位審査の請求や審査において具体的な問題が発生している訳ではない。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

B. 円滑な学位授与の促進

②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

本学は、期間短縮による博士学位取得が可能なルールを定めている。工学研究科においては、本取組みにおいて修士課程と博士後期課程を連携する教育プログラムを平成 20 年度に創設した。平成 20 年度入学者の学年進行に合わせるためにも、履修期間の短縮を含め、学位授与プロセスを透明化する必要は認識されている。教育制度委員会等において議論を継続しており、工学研究科共通の博士学位取得ロードマップ策定の努力を継続する。